

# 現代詩 佳作①

道端に  
 ペットボトルひとつ  
 誰のものか  
 誰のものでもない  
 僕はそれを掴み上げ  
 彼は僕の手を掴む  
 つぼん、と彼が声を上げ  
 うん、と僕は頷いた  
 汚いなんて思わないで  
 君も誰かにおびえて  
 僕と同じように  
 逃げたのかい  
 道端に  
 ごみ箱ひとつ  
 堂々と  
 溢れんばかりの  
 迷子たち

### 講評

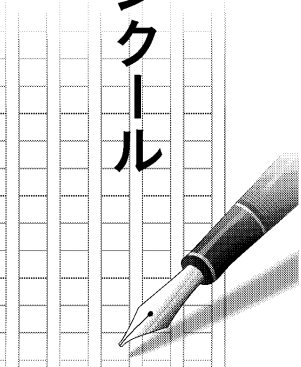
ペットボトルが「僕の手を掴む」ところから、この詩に引き込まれた。そして「つぼん」という声。作者の意識に、ゴミ箱、ペットボトル、僕とすべて同等な関係が存在する。最終の二行に意外性があり、詩人の健全な精神が見える。(審査員・金井 雄二)

## 第49回 神奈川新聞 文芸コンクール

### ペットボトル

大和田 宏樹 作

おおた・ひろき 1993年生まれ。会社員。川崎市多摩区



原住 作品の掲載に当たっては、文通りを原則としています。作作品は順次掲載します。

今回は8日の予定

# 短編小説 最優秀

## 風の中で生きる

村中 江利 作

いつものように平沢が山の見回りをしている。大見岩のそばでくまどくまどしている女がいた。どうやら足をくじっているようだ。靴を脱いだ左足を沢の水に浸けている。こんな山奥まで入って来るなんて、この辺の者ではないだろう。「まったく…」平沢は呆れながらも女に近づき声を掛けた。「どうした?」

「平沢は沢から女を引き上げるため、女を背負った山肌を這いすくんで来た。数ヶ月前に見た時とは、あまりにも変わり果てた姿に、平沢は同情を隠しえなかった。もう日も暮れる。二十分ほど下ったところに車を止めてある。一緒に下ろうよ」女は返事をしなかった。平沢は無言のまま横にあるリュックに脱いだ片方の運動靴を詰め込むと、女の脇腹を持って立たせた。「このままにしておけない。行方不明と騒ぎになったら迷惑なんだ」幾分強い口調で言うと、女は黙って従った。痛

平沢は地元観光協会事務局長をしている。事務局長と言っても、仕事は体を動かさなければならない。職員が五名しかいないのは、巡回バスを運転したり、リフトを動かしたり。人手が足りなくなると、時には、自分が補助要員としてどこへでも出向く。時にはスキー教室の日程にまで乗り出さる。自己流のスキー技術に冷や汗をかかなくともあった。それでも山暮らしを続けてこられたのは、この騒々しい季節がある反面、シーズンオフの静けさを知っているからだ。この山で育った平沢は、その二つの顔を持つ山の魅力から離れられずにいた。いや、本当の理由は他に山には大事なもの、友人は誰もがこの理由を知っていたが、「あいつは根っからの山男だから」と、山を下りない理由をあえてこの一言で片づけた。そう、その通りだ。だからこの仕事を選んだのだ。

山は冬の時期が一番忙しい。スキー目当ての観光客相手、この地域の生計は成り立っていた。冬を無事に過ごす。山で生きる者にとってはそれが一番大事なことだ。何かあれば客は寄り付かない。だから気を抜いたことはいくつかある。事故は起きる。あの日も前日の吹雪が嘘のようだった。その日平沢は近々開かれるイベントの打ち合わせで麓の商店街を回っていた。「平沢さん、サイレンが聞こえる」商店街の会長が慌てて平沢を呼びに来た。急いで店の外に出てみると、確かに山からサイレンの音が聞こえる。「雪崩か…」

平沢はすぐに事務所へ連絡を入れた。「ゲレンデで子どもが一人雪に埋まった。今、消防や警察に連絡して救助を要請しているが、詳細は不明。どうやら散らしが吹いたらしい」嫌な予感がした。散らしがこの地域独特の冬だけに現れるつむじ風のことで、昼夜を問わず突然現れて巻き込まれた者の境界をなくし、体中の体温を奪うような冷気を体にたたきつける。ほんの数分のことだが、一歩先も見えなくなるような真っ白な世界に、ゴーという風の音が聞こえる恐怖は、地元の者も慣れることはない。動くこともできず通り過ぎるのを待つ間に、方向感覚は失われていく。「最悪の事態にならないといいが…」平沢は打ち合わせを切り上げ、急いで山へ引き返した。ゲレンデは予想に反して静まりかえっていた。

「何か一つでも遺留品が欲しいって言う母親の気持ち、切ないですね」また、平沢はそう思わなかった。「探しているのは遺留品じゃない。息子を探しているんだ」また、平沢はそう思わなかった。「探しているのは遺留品じゃない。息子を探しているんだ」また、平沢はそう思わなかった。「探しているのは遺留品じゃない。息子を探しているんだ」



田辺 和郎 画

あれから半年以上経った今でも、弟は見つからない。遭難現場の下に流れる沢まで落ちたのではないかと捜索範囲は広がったが、手袋一つ発見することもできなかった。「行方不明になった子どもの家族が、山に越して来た」そんな噂を聞いたのは、事故からほどなくしてからだ。子どもを探するため、母親は毎日山を歩き回っているらしい。平沢は東京の仕事辞め、農協で働きたと平沢の部下が教えてくれた。

「結婚式場でコーナーターをしようとしたんです。私に合っていたようで、藤井と結婚してからもずっと仕事を続けていました」女は天職だと言った。幸せになるお手伝いをする。こんなに楽しい仕事はない。順調に昇進し、何もかもうまくいっていた時、長男を妊娠したと言った。「予定外の子でもした。さんさん悩んで、生む決心をしたけど、仕事も辞めようとは思わなかった。ギリギリまで働いて…そんなことを思っているうちに切迫早産で入院。四か月も入院して生まれてきた子は未熟児だった。夫は助けてくれたけど、すぐに復帰するはずだった仕事は二年か休むことに。やっと社出した時は、私の場所に他の人が座っていました」病弱な子どもを抱えて、年中病院に通う。人の

### 講評

なんとも複雑な事情を抱えた二人を、じつじつと厚みを持って描き出している。いきなりささやかなさが描かれているのは、冬にはゲレンデとなる雄大な山々が背景に据えられているからだろう。(審査員・角田 光代)